衣生活からみた3歳児衣服デザインの一考察

鈴　木　直　恵*

A Study on the Costume Design of Three Year Old Children in View of Life of Clothings

Naoe Suzuki

は　じ　め　に

3歳児に適合した衣服のデザインとはどのようなものであろうか。3歳児衣服という特別のカテゴリーは存在しうるのであろうか。私の，子供服研究の出発点として，本論では，このような問題を扱った。そしてこの問題は，3歳児の成長段階とその生活環境との関連の中で考察されるべきであると考えた。何故ならば，3歳児は，乳児期から幼児期への転換期にあたり，精神・肉体ともに著しい成長をみせる時期であるとともに，他方では，周囲の影響，特に保育に携る人間，主として母親の影響によるところが多いからである。

前者について言うならば，彼等の旺盛な成長欲求から切り離して「衣服」を考察することはおそらくできず，成長過程との関係でひろく「衣生活」が考察され，その上でデザインが追求されなければならないと考えるからである。

他方，育児上の主たる存在である母親達の意識も，時代とともに大きく変化してきており，彼女達が，どのような観点や感覚上の配慮から子供の衣服を選択しているのかも考察する必要がある。特に今日，「女性の自立化」の流れの中で，「外で働く母親」達が増加しており，これは，保育の問題にまで深く影響を与えるであろうし，子供の衣生活の面からも，無視できない要因となるであろう。

本論は，手始めとして，子供の衣生活の実状調査を行なうとともに，子供服の生産者であるアパレルメーカー側の企画面からの考え方を聞き，さらに，彼等の現実の衣服の重要な要因となる母親達の意識をも調査し，考察しようとしたものである。調査の概要は下の通りである。

(1)　3歳児を対象とした調査

①　調査対象：東京都目黒区立大岡山保育園3歳児クラス　男児11名　女児8名

②　調査期間：1987年7月28日～8月25日

③　調査方法及び内容：保育園での一日のカリキュラムを通して，3歳児の身体的動作や遊びの内容，会話の中に表われる衣服表現，着脱行為の自立度等を観察調査した。

(2)　母親を対象とした調査

①　調査対象：対象園児のうち，長男・長女・次男・次女の母親各1名ずつ。但し，長男・長女はいずれも独りっ子。

②　調査期間：1987年7月11日～8月1日。

③　実施場所：目黒区大岡山周辺の調査対象者の自宅。

④　調査方法及び内容：対象児の衣生活の実態や母親の子供の衣服に関する意見や問題点等を，質問手法によって調査。また，所有している夏物衣料1枚1枚につき意見を

* 本学助手　服装デザイン

聞いた。

(3)　調査対象園及び調査対象者の諸特性

目黒区立大岡山保育園は，全体で園児120名の大型保育園である。3歳児クラスの母親は，19名中16名が常勤で，他の3名もほぼ常勤的に働く母親達である。常勤率の高さからみても，調査対象となった母親の職業意識はきわめて高く，特に専門職への就業が多い。それ故に，保育に関しては，「働く母親」としての問題意識を持っているようであった。

Ⅰ　3歳児の衣生活にみられる自立化・社会化

子供は不断に成長するものであり，その自立化・社会化は，いずれの年齢においても見られることであるが，特に3歳児は，様々な面で著しい画期をなすものと思われる。

3歳児になると，言葉や行動が複雑化・高度化し，抽象的内容の理解も深まり始める。特に自分が納得できないことには，あからさまな拒絶を示し，口頭で反論するという自立化の傾向も見せ始める一方，意図的に幼児性を装って親に甘えることも覚え始める。つまり，自分の計算を立てて，大人の世界を試し，どこまで努力しなければならないかをしっかり秤にかけ始める年齢と見てよい。また，非常によく自己を統制し，社会的対人関係を上手に処理できるようになる。言い換れば，社会化の始まりである。従って，この時期の保育は，自由と規律をバランスよく教えなければならない微妙な段階にあると考えられる。

幼児期における自立化・社会化の概念について，社会心理学的に次のように分析されている。ピアジエは，「子供の社会化とは，単に人と人の関係，社会の成員間の関係のみならず，さまざまな物，子供が推論できるさまざまな概念の関係の理解が出現してくる過程を示し，子供が社会化するのは，6～7歳になってからである」[1]としている。それに対して，ワロンは，『子どもにおける社会性の発達段階』という論文の中で，次のように説明している。「子どもは3歳ごろになると，家族の構成とか布置と呼ばれるものに敏感になってくる。子どもは自分のことを単に同胞のひとりとみなすのではなく，ひとつの全体のなかにはめ込まれているようにとらえる。従って，自らの自立性を意識化してはじめて，それと同時に家族というものを意識化できるようになる」[2]と，子供の自立化は3歳から始まると指摘している。ワロンは，家庭内的な関係性の知覚で自立化の傾向を語っており，ピアジェは，更に一歩進めて，さまざまな概念の関係の理解の出現に，社会化の傾向を捉えようとしている。

では，衣服の観点からみた子供の自立化，社会化とはどのような事か考えてみたい。身体的発達の面で言うと，指先の器用になった彼等は，自分の力で衣服の着脱をするようになる。同時に，基本的生活習慣の確立，つまり，食事や睡眠，排泄などの自立も完成に近づいてくる。衣服における着脱の自立化傾向は，すでに2歳位から見られるが，3歳児になると，みずから進んで衣服を選択し，着脱をするようになり，心身ともに自立化傾向が強まってくる。また，意志の疎通がかなり可能になった彼等は，兄や姉の衣服を真似したり，他の子供の衣服をうらやましがったりする傾向を見せ始める。つまり，ワロンのいう「家族の構成とか布置」に敏感になってくる。さらには，それらの意識が，「兄のように男らしくなりたい」「お姉さんのようにステキになりたい」という願望をうみだし，その表現の一手段として，衣服を用いて行う傾向にある。何故なら，衣服は可視的であり，彼等に強い印象をあたえるため，3歳児の発達程度で十分他の者を模倣できるからである。

また，彼等の仲間どうしの相互関係で観察すると，図1のように，互いに協力しあって，それぞれの役割りを消化して，人形劇を演じたり，図2のように，積木を利用して，互いに試行錯誤して，高速道路を組み立てたりするなどの共同作業が行なわれている。

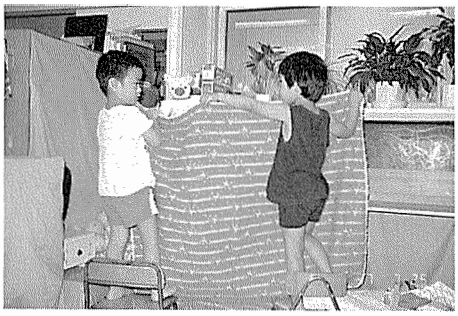

図1

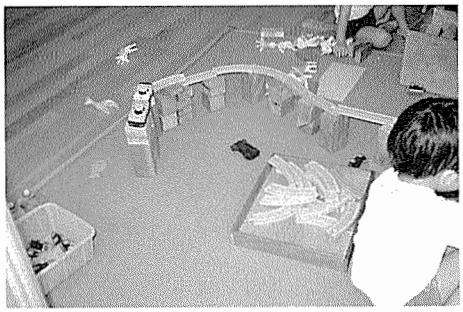

図2

このように，3歳児は，明らかに2歳児とは異った状態にあり，自立完成期である4，5歳児ともちがう画期に位置すると考えられる。ここに，自立化，社会化の出発点である3歳児の衣服デザインが，彼等の自立化欲求を満たし，順調な社会化を促進する衣服であらねばならないと考える理由がある。

Ⅱ　3歳児の成長段階と衣生活の実態

1.　着脱行為からみた場合

実際に3歳児の衣生活において，自立化・社会化がどのように表れているのか，実態調査の報告を下記に示す。

3歳児は，まだ完全に着脱での自立が完了する時期とは言えない。かなり環境による個人差，月齢差が大きく，一様ではない。

図3は，Tシャツから頭を出してみたものの，後ろに手が回ってしまい，それ以上自分では，脱ぐことが出来なくなってしまった状態で，3歳児の身体機能の限界を示す好例と言える。このような苦い体験がかさなると，彼等は，その衣服を遠ざけるようになったり，着脱行為そのものを億劫がったりすることがある。彼等は，まだ4歳，5歳児ほど自由に身体を処理して着衣することはできず，またそれだけの判断も，意志もそなわっていない。

同じTシャツにしても，手から抜くものもあれば，頭から脱ぐもの等いろいろある。3歳児の頭回りは，平均52cmあり，また，脱衣時に

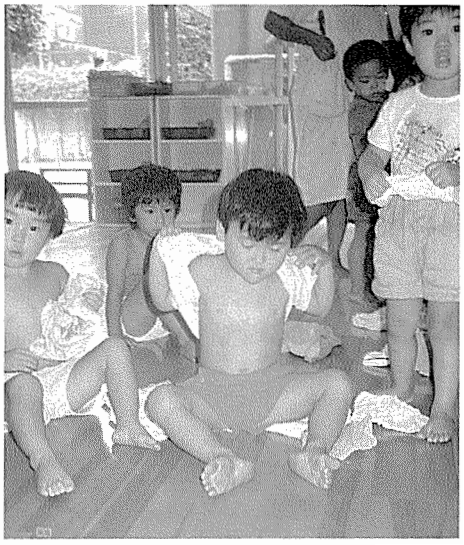

図3

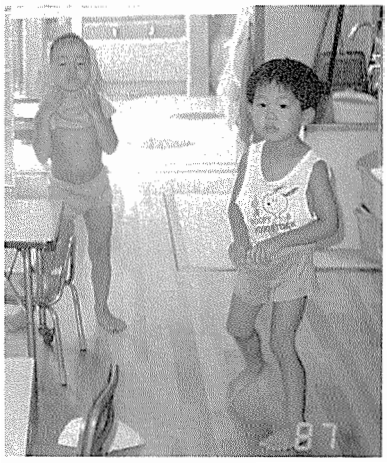

図4

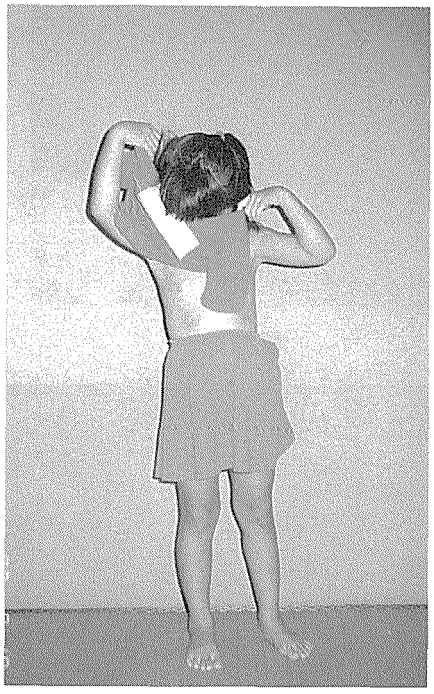

図5

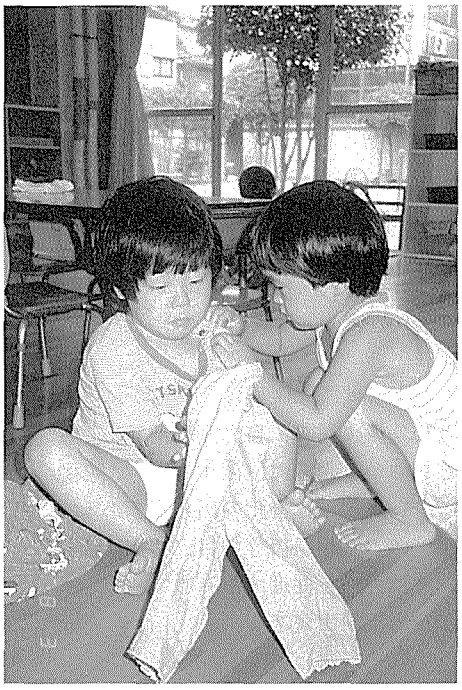

図6

おいて，図4のように，彼等は，衣服を頭上に上げようとせず，まず顔を出そうとする。その結果が図4のようになる。かぶりの衣服の衿ぐり回りは，主に頭回りを参考に決められる為，脱衣の大きな妨げが生ずる。従って，3歳児の衿ぐり回りは，脱衣時の行動を配慮したものでなければならないと考えられる。図5のように，前中心にスナップ等の開きのあるTシャツは，比較的楽な姿勢で着脱を行なっている。

それに反して，肩開きのある衣服は，彼等には困難で，人の手を借りなければ完全には着脱を行なうことはできない。しかし，図6にみられるように，子供どうしが協力し合って，肩スナップを克服しようとしたりする。

タンクトップは，図7のように，腕を抜くことが非常に困難である。彼等は，図8に示されるように，袖を引っ張って腕を抜く。従って，袖のないタンクトップは，彼等にとって厄介な代物であり，その為，勢い図7のように，アームホールを引っぱって，腕を抜くことになる。これは，大人の目からは，意外の事実として映る。タンクトップは，シンプルな構成であり，むしろ，着脱に容易と思われがちであるが，実は袖が，脱衣時には有効な道具となっていたことがわかる。

また，着用に関しても問題点があった。3歳児の中でも特に月齢の低い子供は，図9のように，2つの袖口と1つの衿ぐりの3つの入口のどこに頭を入れたらよいのか判断を下せないものもあった。また，Tシャツも，総柄や無地の場合は，前・後の身頃の判別が，3歳児にとっては困難なようであった。こうして，ワンポイントや前身頃のプリントなどが，彼等にとって着衣時の重要な目印になり得ることがわかった。

ズボンからはみ出したTシャツやタンクトップを，上手にズボンの中に入れる作業ができないため，着丈の短いものは，彼等のズボンやスカートからはみ出したままであった。従って，上着丈は，ある程度長めにしておくことが，子供の軽快な動きを妨げる心配もないと考える。また，親の目からは，はみ出したTシャツ等は

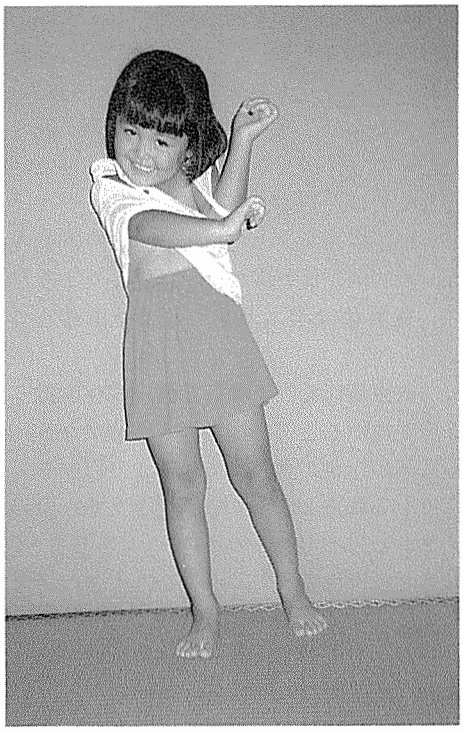

図7

図9

だらしなくも見える。更に，おなかを出していることで，「おなかが冷える」と，心配することも考えられる。しかし一方で，昼夜を問わずおなかが出ていても，平気な親も少なくないこともあり，これらは，母親の意識の違いによって，衣服の選択がなされる一例といえよう。

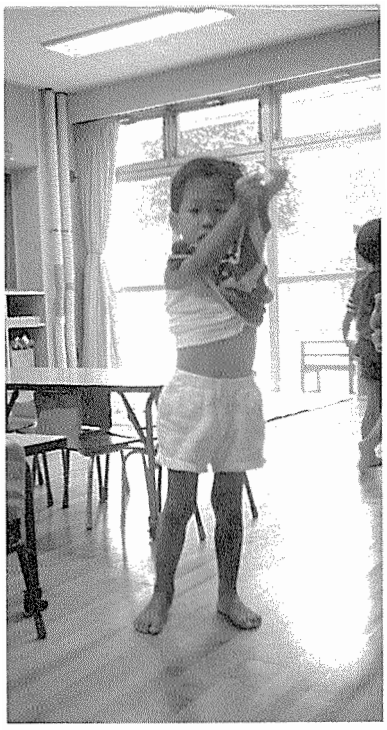

図8

次にボトムに移る。彼等は，2歳の頃から自分でパンツをはくという習慣が，徐々に身につくため，ズボンをはくという動作には，それほどの困難と抵抗を示さなかった。ただ，構成上前開きズボンのウエストボタンの開閉は，3歳児にとっては，指先のこまかい神経を必要とするため，かなり難しい様子であった。図10にみられるように，引っぱりながらボタンをかければならず，両手で，2種類の動作を同時に行なうことが困難であると考えられる。

これに付随して，次のような証例がある。A君は，いつも体にピッタリとした前開きの半ズボンをはく習慣があった。ところがある日，姉のキュロットスカートを着用して登園。そのキュロットスカートは，ウエスト部分がゴムで，裾が広がっており，見た目にも動きやすく脱ぎやすいデザインであった。前述したように，ウエストボタンや前ジッパーの操作は，彼には困難で，いつも先生の協力が必要となっていた。そして女の子用のゴムウエストのゆったりした

図10

キュロットスカートが，男の子に意外な魅力をもたらすという発見がそこに伴った。これは，男の子用，女の子用の区別意識よりも，着用時の機能性，着脱時の簡便さへの魅力が優位となった好例である。この年代の子供にも，使いやすさ，着易さの感覚が，明確に備わることを改めて教えられることとなった。

前開きではないウエストゴムのズボンは，はきやすく，脱ぎやすいという利点はあるのだが，ただあまりに簡潔すぎて，前と後ろをまちがえてはいてしまう危険もある。しかし，ポケットの付き具合でこれは解決できると思われる。そして，ポケットが，単に物を入れる道具ではなく，前後の指標をなくしていることも注目されてよい事実である。また，彼等の体型は，ウエスト寸法とヒップ寸法の差があまりなく，従ってズボンが彼等の激しい動きについていけず，腰囲の途中までずり落ちてしまうことがしばしばある。しかし，ゴムをきつくしてウエスト及び内臓をしめ付けることに母親達は抵抗感がある。従って，3歳児の前後の股上寸法には十分考慮が必要であり，やや深めのズボンが望まれる。

スカートは，3歳児になると急速に着用の回数が増してくるが，子供の活動にとっては，やや厄介な代物である。ジャングルジムの登り降りに際し，スカートの裾をいつ踏むかわからずひやひやしたり，泥んこ遊びでは，裾が泥の中につかったり，滑り台では，裾をまくり上げて滑らなくてはならず，遊び着の機能としては，明らかに半ズボンより劣っている。今回調査を行なった大岡山保育園では，上述したような理由で，保育中は半ズボンの着用を指導している。

2.　衣生活における異性意識・同化意識

3歳児になると遊びの世界も多様になり，しかも共同の作業が含まれてくるようになる。この点でも2歳児とは著しい画期をなすと思われる。しかも，その遊びの中に，「女らしさ」「男らしさ」が表現されてくることも大きな特色であろう。人形遊びを複数でやったり，「マスクマン」ごっこに興じたりする中で，彼等は，性的役割＝社会的役割を学習し始める。このことは，当然，彼等の衣服デザインに対する感覚にも影響を及ぼしてくることになる。彼等が，男女の差異を認識するに際し，衣服デザインが，如何に大きな意味をもつかに関して，興味ある実験が報告されている。

キャッチャーは，その調査において，「3歳児になると，洋服を着た男，女の見分けは，ほとんどまちがわない。しかし，洋服を着ていない場合は，頭と胴の組み合せはむずかしい」[3)]としている。この実験の教えるところによれば，3歳児は性器の識別を基礎として性差を区別するよりは，洋服の組み合せ，洋服に表現された「女らしさ」「男らしさ」を通じてこれを区別するということである。

彼等が，洋服やヘアースタイル等を通して，「男の子」「女の子」を判断する例として，今回の調査において，次のような話がある。

女の子らしい衣服を好むA子は，常日頃B子を男の子であると思いつづけていたらしい。事実，B子は髪の毛も非常に短く，いつもボーイッシュないで立ちであった。ある時，2人で一緒にトイレに行った時，A子は，「あなたは男

の子だから，あっちのトイレでしょ。」とB子に指摘した。思わぬ指摘をされたB子は，その場に茫然と立ちつくしていた。以来B子は，登園時に，スカートを多く着用するようになった。A子がB子を男の子とした判断が，キャッチャーの言う外観特に衣服やヘアースタイルに起因していると考えられる。次の例も外観に関する事例である。

A君が暑い日，髪の毛をしばって登園。クラスの友達が一斉に，「A君女の子みたい。」といった。それを聞いたA君は，急いで束ねた髪をほどいてしまった。髪の毛を束ねることは，あくまで，「女の子」としての指標であり，そこに彼等は違和感を感じたのであるが，ここで興味をひくのは，A君のその後の変化である。急いで髪をほどいたA君は，この体験の中から，結髪＝女の子という意識を学んだのである。あるいは，学ばされたのである。3歳児の社会的作用がここにみられる。

女の子達が体に布をまき付けてお姫様ごっこをしていた。それを見ていたB君，「B君もお姫様になりたい。」この発言を聞いたC子ちゃんが，「B君は男の子でしょ。そんなことを言うとB子ちゃんになっちゃうよ。」こうした事例からも，彼等の「男らしさ」「女らしさ」の感覚が，外観を基準にして，かなり明確に区別されていることがわかる。

ところで，彼等の「男らしさ」「女らしさ」の区別には，身近に居る親しい存在，例えば兄，姉達から受ける印象が強く作用している様に思われる。次の事例を考えてみよう。

C君は，図11のように，真夏の暑い日でも長ズボンをはく。周囲の親や先生がどんなに半ズボンをすすめても，一向に受けつけない。しかし衣生活に関しては，通常の3歳児よりも発達しているように見える。図11のように，自分でその日に着用する衣服を選んで，自分できちんと整理ができる。また，衣服の好みもはっきりしており，特に素材感に関しては，綿100％以外のものは着用しない。そのC君が，どうしても半ズボンを着用したがらないということであった。母親等の意見を聞いてみると，どうも彼の兄(中学2年生)の影響であると推断される。C君は，「兄」と同じようになりたいらしい。その「同化意識」が，長ズボンへの執着となってあらわれてくるようであった。

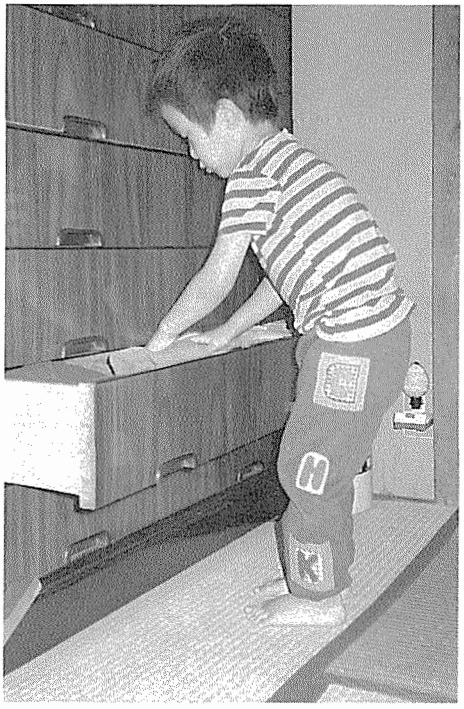

図11

これと同じような現象は，遊びの中にも多々表われてくる。図12・13のように，彼等は，ままごと遊びが好きである。普段，男の子はあまり「女の子らしい」と言われることをきらうのであるが，こととままごと遊びに関しては，自らエプロンをつけて，スカートをはきたがる。これは，おそらく彼等が女の子になりたいという願望をもつからではなく，母親と同じ存在になりたいという願望の表われであろう。つまり，自己を「母親」に同化しようとすることであり，母親という役割を自分のものとすることである。それが，「エプロン」であり，「スカート」のイメージである。時には頭に布をまきつけたりする。これらは，「母親」の象徴であり，この道具を利用して，「同化」しようとするので

図12

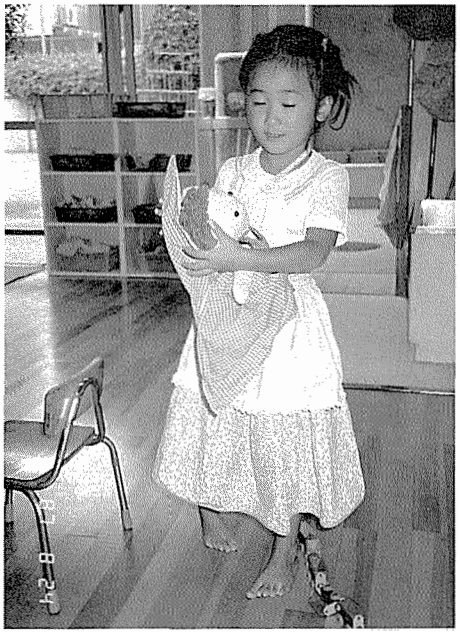

図13

図14

図15

あろう。

調査の印象としては，「女の子らしさ」を示すと彼等が考えている衣服は，次のようなものであった。

(1)　フリル付きの衣服。

(2)　クルクル回るスカート。

(3)　髪止めリボン・ゴム。

(4)　レース付きのもの：調査保育園では，レース付きのパンツが女の子に大いに流行していた。一部の子がはき出し，「かわいい」印象の連鎖反応で多くの子がはき出したものらしい。3歳児なりの流行の世界がここに表われている。

彼等に，男の子を表す色，女の子を表す色を聞いてみると，男の子は青（ブルーとは表現しない），女の子はピンクとほぼ全員一致で答えるのであるが，しかし，ある男の子の場合，「ピンクなんて女だよ」と言いつつ，実際は，ピンクの半ズボンやポロシャツを好んで着る。この「矛盾」は彼にとって，それほど大きいものではないようだ。

Tシャツ等のプリントの絵柄をみると，女の子には，「キキララ」「キティ」が見られ，男の子には，流行の「マスクマン」が見られた。仮に，女の子で「ピンクマスク」を好み，人形まで持っていたとしても，Tシャツのプリントにまでそれを入れることはなさそうだ。「スヌーピー」は，男女双方に見られたが，これはこの絵が「かわいらしさ」と，両性具有のイメージがあるためだろう。また，ティーンや大人達に流行したモノトーンルックは，市場の子供服にもだいぶ見られたが，3歳児には人気がないようだ。ある母親の話では，「せっかく買ってき

表1　第一子・第二子における衣服所持数の比較

単位：枚

服種		長男	次男	長女	次女
Tシャツ	無地	1	4	6	2
	肩あき	0	2	0	2
	プリント柄	3	0	1	2
	ロゴ入り	4	0	0	0
タンクトップ		3	4	4	3
ポロシャツ		2	3	2	2
布帛シャツ（半袖）		1	0	0	0
半ズボン		14	10	4	8
ジョギングパンツ		0	3	0	0
スカート	プレーン			5	3
	フレアー			2	0
	キュロット			1	0
ブラウス（前あき・半袖）				2	3
ワンピース	（半袖）			4	1
	（ノースリーブ）			2	2
合計所持数		28	26	33	28

ても，こんなのきらいと着用してくれなかった」とのことである。おそらく，黒は彼等に「楽しいイメージ」を刺激しないからではなかろうか。黒がもつイメージに，大人と子供では隔たりがあるのかもしれない。

以上のように，3歳児は，より「男らしい」「女らしい」衣服を好むとともに，身近に居る「魅力的な人」と同化したいという意識を強く持っているようである。彼等にとって，その最も端的な方法が「衣服」なのである。

このように，3歳児の衣服は，彼等の成長過程と切り離せないものであった。個々の衣服デザインも，その子が置かれた具体的生活環境の中で再検討してみると，様々な問題を抱えていることが判ってくる。

3.　衣生活をめぐる母親と子供

今回，子供達の実状把握をするとともに，母親達にも，子供の衣生活に関して意見をきいた。まず，夏物衣料の所持数に関して調査をしてみると表1のようになった。また，新品かおさがりを調べてみると，あきらかに，長男・長女と次男・次女との間に差が出た。今回調査を行った次男・次女宅では，夏物衣料すべてが，おさがりであったことが特徴としてあげられる。また，なかには，三代目というTシャツもあらわれた。それに対して，長男・長女宅（共にひとりっ子）では，衣料品のほとんどが新品，また数量も多く，なかには，ほとんど利用されていない服種もあった。その大きな理由として，母親と子供の好む衣服のちがいが考えられる。図14は，母親の好きな衣服。図15は，子供の好きな衣服である。思うに両者の違いは，着脱の簡便さの違いが考えられないだろうか。母親の好む衣服は，袖口がボタンになっており，これは3歳児にとって，袖口ボタンの開閉は困難である。それに対して，子供の好む衣服は，着脱が比較的たやすく，しかも，めりはりのある横縞である。この横縞（幅1.5 cm位）は，他児も好む傾向がみられた。これは，夏物衣料の特徴であるマリンルックに起因すると考えられるが，それとともに，はっきりした横縞は，彼等に明快さ，心地良さを与えるのではないだろうか。

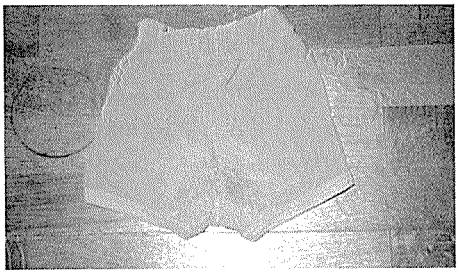

図16

服の色に関しては，パステルカラーのものは，上・下の組み合せが難しいとの意見があった。特に保育園では，自分のストックしている衣服を子供が勝手に選んで着替えるため，しばしば親を驚かせるような組み合わせが出現する。従って，半ズボンは，広い色の範囲の組み合せがきくように，白系統とか，紺系統を多く購入するようになる，との事であった。

価格については，高いので，バーゲンを利用する人が多く，逆に，あまり安価すぎるものも素材が悪く，すぐに図16のようにほつれてしまうとのことである。特に3歳児は，滑り台が好きであるため，かなり素材がしっかりしたものでないとすぐに摩耗してしまう。この部位の摩耗は，調査家庭の全家庭でみられた。これとは逆に，素材，縫製が頑丈にできすぎて，利用されていない衣服もみられた。これは，ネックラインが3重になってくるまれており，そのため，収縮性に欠け，着脱がしづらく，子供に嫌われた例である。

以上，母親達の子供服に関しての素直な意見をまとめてみた。個々に意見を調査すると，非常に具体的で現実的な話であった。近頃言われているブランド志向の母親像は，むしろ希薄であった。確かに，衣服を購入する時点において，ブランド志向なる感覚が呼び起こされる場合もありうるであろうが，現実に子供と生活し，日々衣服を取り扱う母親達にとっては，子供の衣服は，もっと実用的なものであると印象を強く受けた。

ま　と　め

以上，3歳児の着脱の状況，衣生活における異性意識・同化意識，母親達の子供服に対する意見等，実例の中にみてきた。

調査を終えて，改めて感じられたことは，着脱の自立過程や，身近な人への同化意識や，それを通しての性的役割の学習などが，3歳児の社会化を促しているということである。

着脱行為と社会化の関連でみると，一旦着装しおえた衣服は，自己の身体や皮膚の一部に融け込んだ存在であるが，着脱行為の過程では，衣服は「物」として対象化されており，この「物」をめぐって，大人の協力を求めるか，自分の主体的意思を働かせるかの選択に彼等は迫られる。ところが，この年齢の身体的機能や判断能力には限界があり，着脱時に一旦混乱すると，容易に脱却することができない傾向にあり，それが大人への依存を要求する原因になったりする。

たとえば，第2章でも述べたが，かぶりの衣服の衿ぐり回りは，3歳児の着脱の状況から考えていかなければならず，単に「子供服」一般としてとらえられない問題を含んでいる。また，袖の形一つにしても，大人の考えている衣服の着やすさと，3歳児にとっての着やすさはちがい，真夏だから袖のない方が涼しくて良いという単純なことでは推し量れないものであることがわかる。袖自体が，彼等3歳児には，着脱にとって重要な道具であるから，それを忘れた衣服デザインは，やはり問題があると言わねばならない。プリント柄も，3歳児にとって，前・後を判別する指標となっている。従って，衣服の着脱とは無関係に，キャラクター商品的要素だけで取り扱われることは，一考を要するといえる。

次に，彼等の意識の面から考えてみると，父・母・兄・姉などに対する憧憬の念が，3歳児の同化意識を呼び起こし，これを通して社会的役割の認識や性差，性的役割の認識に到ることが認められるが，その際，衣服は，可視的であるだけに，視覚的に真似をするというきわめて大きな役割を果たしていた。

彼等は，衣服の色や形状，髪型について，自分なりに，男の子・女の子のイメージをつくり始めている。そのイメージを通して，社会の一員として，男女の役割を学習していると思われる。

このように，3歳児にとって衣服は，単なる身体保護という存在でもなければ，単なるファッションでもなく，彼等が置かれた人間の諸関係を認識し，その中に自己を発展させてゆく契機として存在していることが確認された。従って，3歳児衣服特有のカテゴリーは存在するのであり，彼等の衣生活全体との関連でそのデザインが論じられるべきものであると言える。

そうした考察を踏まえて考えられる課題は，彼等の社会化，自立化を促進するデザイン・着脱等の実験・今回問題となった衿ぐりの広さ・

袖の有無や形状のあり方・アームホールの大きさ・前身頃，後身頃の区別のしやすさなど，3歳児の身体的機能や精神にとって，適切なデザインの究明である。

最後に，快く調査の依頼に応じてくださった目黒区立大岡山保育園，並びに，調査中子供達が平常でいられるよう心配り下さった先生方，忙しい中，長時間にわたる調査にご協力頂いたお母様方に，末筆ながら感謝する次第である。また，貴重な資料やご助言を賜わった株式会社ファミリア・東部広報室室長渡辺多恵氏，ベビーライフ・トータルプランナー石崎景子氏に厚く御礼申し上げる次第である。

注

1) J・ピアジェ著，滝沢武久訳，思考の心理学，みすず書房，p29，1968年

2) H・ワロン著，浜田寿美男訳編，ワロン・身体・自我・社会，ミネルヴァ書房，p83，1983年

3) E・マッコビィ編，青木やよひ他訳，性差その起源と役割，家政教育社，p165，1980年

参考文献

商品科学研究所編，CORE No. 3，よりよい子供服への提案，1975年

東京都商工指導所編，業種別総合調査報告書，1982年

株式会社ファミリア編，ファミリア30年のあゆみ，1980年

東洋，柏木恵子，R. D. ヘス著，母親の態度・行動と子どもの知的発達，東京大学出版会，1981年

ハンガリー国立教育研究所編，ハンガリー保育園における美的教育，明治図書，1972年

生活科学研究所編，80年代の経済発展と女性，生活科学研究所，1982年